

是乎炎皇嘗百草分良毒禹貢載著名物詩三百詠之於此興而品物醫藥愈衆矣吾曾聚海内諸州之異品求海外殊方之珍奇栽培草木畜養鳥獸欲多識其真錄諸紙上貯諸胸懷是詩書之餘興靜中之一樂也歲月既積寶貝玉石古印古瓦百般精工窠器奇物異產纂々乎盈千樓中神丹靈齊嘗收蓄於藥歌不讓方今之醫流吾歷年之覃思惜後世若為烏有今茲秋九月營一字之寶庫于荏原郡蓬山別墅擇取其尤或排之於架上或列之於筐中至夏古之品如塵鶴之仆石如甘泉之遺瓦未嘗得之尚且至如高辛之鐺燧人氏之鑽炎皇之琴大貝之瑟今雖未嘗能見之玉石之寶色贖萬古之光耀窠器之

畫彩存千秋之文章天下所有庶品盡在一瞬之中豈其不愉快乎故以聚珍為庫號而已吾百年後其守之者勿散彙品勿毀寶庫宜存乎永世乃自繫文辭以樹苑中爾維時文政十年丁亥冬十月也

源重豪榮翁撰於城南荏原郡隱館 時年八十有三

藩府の街名を改む 第三十二條

文政十一年戊子正月藩府の東南ふ木屋町といふ街のを時をりくふかくつら此神のあら火わこ於市民火取守ることの懈るふ河らねと木生火の因や河りけん 公のを憫給いて金生町と改名 命せらばこは蓋し金

生水の因をとり玉ふふらん

郭註莊子と和釋を 第三十三條

内宮より郭象注莊子の和解をおぼせける 臣槃ふこれを

命し給ふ 臣槃が職おほらふと辭する事能はば竟乃謹

命を受け奉る郭象注莊子内外篇三十五卷全く成て

奉上も文政己丑三月十五日 公即進獻を翌日

内宮より速に 褒賞を 賜はふ頃日 臣槃ハ聊時氣に感

しうふいたきハ 臣大野周意を御使として其 御賜物と

全く 臣槃ふ 賜はる 臣槃謹て領し奉ふ是 公の恩惠骨

肉お加はり生涯いつきの時を忘るべし猶且遠祖の面

目永くつく時なり

莊子和釋序

南華老仙の真經ハ河南の郭子玄の序ふいふが如く莊

子の書ハ本然するといふべし無心を志るといふべし無

心ぶ時ハ應ふ隨いふ應し其時ふ志をかふ故ふ化を體

と形し萬代ふ流きて物ふ不經なれとも百家に冠ふり最

よみかさしといふふとぬきハ心文外ふふるく玄冥の境ふ

獨化して源流深長あり郭子玄の注ハよく其源長さあり

得たりさきと初學此人の注ふよりて本文を解ふ事

かたし故ふ 國字をもて郭注をとたまさちのよみか

たハ林希逸の注沙門玄英の疏林西仲の因及び毛利貞齋
の抄引てよき易からしむ志のばあきと筆れめくらざ
ふ所おちくばしめをとた終成のこともものほらむ事を恐
るゝねりたとつハ蟋蟀の丸をとる蕪合圖成をつぶご
としよむ人これつゝきる事形をハ尚後人の補正を承か
ふのゝ

文政戊子秋月

曾繁志る

此序文ハ予の副本と志るしつ 獻本にハこの趣意と
列言中つゝる

鳥名便覽鏤版 尊序附を 第三十四條

文政十三年庚寅 公嘗てより斯方及び殊方の衆鳥とめ

で給いゝ架中のみちより鸛鶴鳧雁の属ハ池沼及び樊籠
不群成ふを頃間フシロ暗記此名稱成侍臣等に書成つくらせ給
ふ名付て鳥名便覽と顔して木に忍らせ給ふ事ハ 尊序
に詳あり

鳥名便覽 尊序

攝生之法以遊心干物表而涉日為要余嘗玩書畫文房古器
金石草木鳥而又畜養毛群每歲蕃息為至羽族自少年愛玩
西洋殊方和漢之産年々歳々 聊卯則自飼餌得時則換羽毛
以新毛彩或倣媒鳥發奇音奇調不亦樂乎余昔逮頒白時愈
以審其養法春晨秋暮樂百轉於耳娛五彩於目以總鎮日之

永為而今歷八旬愈益莫倦矣古人謂常聽嬌鳥之聲則神歡體自輕其然矣哉余亦嘗傳聞漢人及蘭人之言常養羽族聽其鳴聲而爽耳目則養天年之一術也故余每養毛翎為攝生遊玩而已積年之久雖未及師曠之精妙頗識其情性略辨其類屬是以又或圖其真排纂牒帖備寬閑之繙觀為今也衆鳥盈干架上且樊籠旦夕匡和漢之稱呼當否以樂餘年為耳頃間俾侍臣某々等錄胸記竟乃為一書顏曰鳥名便覽雖未盡其比類足為禽僻之一玩書歟

文政十三年庚寅孟春月

南山老人識於蓬山隱館

臣繁

私の鳥名拾遺をつくら起頭韻且その種族併せし凡一百二十餘名あり屯日 命と俟て木に忍びて

仙禽雙雛の記 第三十五條

羽州米澤此賈人此の春大あふ卯一雙を拾ひ其家の鶏ふ聊させしふ啐啄同時の期恙れく到り玄鶴の雛雌雄を得て初るものもれしるを志り誠小愛おたし取乞求て齋來里是を砌ふ畜養して米壽小近き老の侶と形さバ可あらむとく贈給そのあり渠の志れ深き常に禽僻と自稱する予を慰るの厚き小協ふ嚮る苑中を養ひたく玄裳縞衣の百とせを過るものあり試よさき小傍ふこの雛を遊ばを

きバ忽ち母と睦み子と慈みて素より因ふあふもの如
くこゝれまゝの奇遇の一樂事ありはし産地の名ゆよれバい
てやはありなき米に賀ひもの澤を毛翎ふとおよぼく永
く不老門の春秋を樂めよと人々のうたひをやをふ持俱
よ共に天年を壽成保てと時志らぬ常盤の松蔭ふ放し置
るゝつから從容於さしむふハ文政十三年とし庚寅ふ次
冬至に日しるは

長生樓主翁

昇位 第三十六條

天保二年辛卯 尊齡八十七正月十九日

柳營より 徵河り 齊彬公代らせたまふかしくくも執
達の寫成舉ふと

兵庫頭

上意

松平榮翁多年隱居以後近年追茂國務無恙介助いとし
殊に稀なる高年に及び且御由緒柄別段の譯を以て從
三位被 仰付候
右於御白書院縁側老中列坐松平和泉守申渡之書例ハ原書の
格を館中へ奉賀の列侯繇々として終日とだえふく高
繩手の街ハ來往市にごとし

冷泉前大納言為則卿

位山のほふ悉くも色をいつて榮河らと冷老松に影

奉賀

前薩隅日三州太守兼領琉球國王從 三位中將源老尊
君昇階之盛事

仰瞻南極老君候福壽昌々誰得傳德壓四賢兼善慧富持三
國與琉球如今品位增崇處孰與心空及第秋錦上添花春色
好氤氳淑氣擁高樓 黃磔璞巖曜

臣槃 伏て惟ふふ比年 國務の 尊慮に勞し給ふ事ハ
嘗てより仰望し奉る所おきと吾が傳の齒牙小繫て筆

紙小識をはいとも懼あきバあるさび固より其擢いで
たまつるも既に 公聽ふ入てかゝる 顯位ふ叙られ
むふぬり○あのみ月蓬山園中の養ねたむふ丹鶴卵を乳
きり亦奇瑞ならむ也

馴鷹を賜 第三十七條

天保二年辛卯春二月

柳營よて馴鷹二隻を 賜る 公仰戴して 本府へ護送
一翌春 齊興公代りたまひぬれ放ちる田鶴を捕獲し
て頓了こきを江戸芝邸ついで即

内宮へ進獻す○文化十三年二月別墅へ游獵の節居越と

第三十八三十九條

許せられむふ是より先安永九年十一月馴鷹一居

賜せらる四月二十三日亦然

以上輪臺日録小摺

有氣ウケの辰チ中ナカらせむふ

第三十八條

同年二月八日辛卯

公有氣ウケ

有氣或ハ有卦運氣等小作りたり孰きは是れらん尚質を

一ヒ辰チふあハらせむふ同月十一日

柳營より福壽に擬しシ於數千種此賀品致賜せらせ同

月十三日内班の侍臣たち一拜覽茲許せら於館中ふみち

く寶山を築の如く僉謹て千秋を賀奉ふ

額陰の記 第三十九條

同月十一日鶴岡八幡宮へ扁額奉獻しむふ額陰の記

在昔奉獻雙鶴之畫額亡干文政辛巳之火矣今茲春正月

賜昇位因再製青松白鶴之圖於扁額以奉獻焉 維時

天保二年春三月也

從三位左近衛中將源重豪識

福壽亭の碑文 第四十條

建福壽亭記

從三位前中將源重豪撰

人之處干世也得失榮辱千狀萬態無窮矣在隱士亦尚如斯
盖天命之所令然也不敏而潛干山林與聰明而隱干都會
異又有顯焉而隱者有遯焉而隱者是非遯世之難而能之之
難也其可知矣寶曆五年吾年十有一而嗣

公務逮積歲月通考授時檢閱制度安永二年繼テ 寬陽公之遺意創建造士館封内之民競テ 務文武之學或興廢址或洗夙弊軌範明白天明七年年既庶乎斑白乃讓

公務干齊宣寬政四年卜隱館之地於斯此地雖不能延褒千畝登高阜則一瞬之際滄海淼々二總山々雲煙過眼皆如我有也是以芟榛莽下沙石興葺隱館排書畫及古玩百卉賸馥占四時之春而又素所好養翫毛翎之奇音奇彩以欲樂天年肅々為而近乎塵僻於是再營又隱館常旨恬澹竟乃躋八十餘年之壽域矣今茲春正月恭陞三位伏惟福壽自備不亦天命乎龜崗之陽有一圍行第之地今名離垢關新營一字以為

逍遙游息之所題曰福壽亭時或聽鶴唳松濤則寂々然而更遠乎塵僻昔在 淨國公建喜鶴亭於仙巖園中 公寬閑之日逍遙游息于斯矣今吾追其遠倣之以建此亭記我生涯之概略勒之于石以欲傳不朽爾百代裔孫其勿廢之矣

天保二年辛卯冬十一月立石

右 臣繁 小代撰を 命せらふ文字ハ 臣曾 榛子 聚字を

命せらふ 榛子 謹々顔字聚を

新小瑤光精社を建 第四十一條

同年秋八月二十七日 徵小應して翌二十八日辰牌待て輪臺小のむ出頓小拜謁して 命蒙る頃間の小恙

ハ游獵のためふ愈ふればよろしく鷹の社を建べし鷹字
 狐度カウシて社名を作るべしと 仰らき直小家小婦て其
 夜鷹ふ係る社名を考索ること左の如し
 和名鈔ふ鷹和名太加萬葉集卷十九ふ矢形尾の真白こい
 鷓鴣の扱名あり○爾雅釋鳥云鷹鷓鴣註鷓當為鷓字之誤
 耳左傳作鷓鴣是也鷹音鷓疏云按昭十七年左傳郊子曰少皞
 氏以鳥名官鷓鴣氏司寇也杜註云鷓鴣鷓也鷓故為司寇主
 盜賊是也 嵯峨帝新撰鷹經序云鷹瑤光之精也它日此
所を索得あり於今瑤光の二字を取れり
 地取掘て古銅器を獲たり 第四十二條

天保二年十二月六日朝まど來蓬山園中ふ狐のいさく
 さけぶ聲あり園吏あやとぬもい旭アサヒ日のさく升る夜ま
 ちて園中を巡視るぬ 八幡 菅公相殿に後ふ立ふ稚ワ
 櫛カミの樹の雪に蔽ひさく倒るあり相殿ハ龜の丁夫を
 てこれを植しむる故の根下より一枚の磐石あり起し
 るふ銹たれ銅器あり取揚て計るに十二件あり膳瓶ふ似
 二坐菴花様のも此二面木賊様の八條頓トりさくびと於翌七日
 して上に寶珠の形ありとの八條 何てふ物なるをあらざ蓋
 臣槃と 徴て審定せしむ 臣槃 何てふ物なるをあらざ蓋
 は真言法徒の齋器あふらん其青銹をり考ふるに凡二百
 年前後ものぬるつ古銅の説ハ詳ふ方密時河内鬼
之の通雅ふりえたり

神其隠れよるを惜てや今顯て我 公に有と形り古玩の
一不備一玉ふのこ

福壽亭落成を 第四十三條

同三年壬辰春三月十日福壽亭はトめ成飛彈山の真木
邪玖島の杉とて精工美麗をつくし瀟灑をきいじ樓を天
漪と名付玉ふの樓上より海中展望めハ天は水の如く水
ハ天の如く海潮を一瞬のうちハ眺望を色バかくハ號し
たまふふり亭中に觀音大士の像を安置し玉ひ其雙聯の
云光風霽月照四海千古不斷大潮音と述し給ふ其側に茶
室を營ぎ樂心菴と號し玉ふさて亭取のとなみ玉ふ 尊

慮は 御撰此碑文小つばらぬ

尊齡八十八の初度 第四十四條

同月十五日あの日天うらゝにいて塵志つかなり又隱館
小賀延をもふけむ朝まゝ来まいと十の 公族曾孫玄
孫殿君姫君つとい列々ツライクふ並居たまいく千秋賀賀ホギ玉ふ午
元もとトめ

内宮より洲濱蓬萊浮寶ウキタカラの形をつくりとまきくの中ハ福壽
小すま擬たるとほく此品を積ふつゝかさねをり吳織ウクレ此綾羅
錦繡ハ五色うらゝのよいく十卷ツなぶを計かもあえあんとい
はら君御品取まいらせたまふ